

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：31604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01098

研究課題名(和文) 古代エジプト中王国時代末期の王朝交替プロセスの解明

研究課題名(英文) Investigating the transition of dynasties at the end of the Middle Kingdom

研究代表者

矢澤 健 (Yazawa, Ken)

東日本国際大学・エジプト考古学研究所・客員教授

研究者番号：10454191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：古代エジプトの中王国時代末期(紀元前17世紀頃)に、北部でのアジア人勢力の拡大に伴い、在地の支配層が当時の中心だったメンフィスからテーベに移動したという説があるが、反論もあり、実態は不明だった。本研究はメンフィス地域にあるダハシュール北遺跡の同時代の墓の資料を用いて、数理的手法や碑文資料を併用しながら考古学的分析を進めた。結果、中王国時代末期の考古資料はメンフィス地域とテーベで類似していることが示され、メンフィスからテーベへの人々の移動を支持する成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中王国時代末期はエジプトの王朝区分では第13王朝にあたり、この時代は文字資料が極めて不足していることから、歴史の実態が不鮮明な「暗黒時代」だった。本研究は考古学的資料の分析からこの時代に光を当て、当時のメンフィス地域とテーベという2大拠点と、北部のデルタ地域との関係性やその変化の流れに一定の評価を与えたことに学術的な意義がある。王朝交替プロセスの解明は、アジア人の勢力拡大など、所与の条件・環境の中で文化がどのように継承されていたのかについての洞察に繋がる。人類史上でも長大な文明を築いた古代エジプト人の文化継承システムへの理解は、持続可能な社会の構築という観点からも重要な意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Due to the expansion of the Asian population in the Nile Delta, it has long been believed that the ruling class of the indigenous dynasty at the end of the Middle Kingdom (around 17 century B. C.) was forced to relocate from the Memphite area to Thebes. Recent scholarly discussions, however, have challenged this idea, leaving the history of this period largely unknown. This study examined archaeological data primarily obtained from Dahshur North cemetery, with the aid of historical and morphometrical methods, to reconstruct the history of that period. The result shows that the archaeological evidence between Memphite and Theban areas shares the same characteristics, which supports the idea that there was a population migration from Memphis to Thebes at the end of the Middle Kingdom.

研究分野：エジプト考古学

キーワード：古代エジプト 中王国時代 考古学 墓地 王朝交替 ダハシュール北遺跡 人口動態 社会階層

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代エジプトの中王国時代(紀元前21～17世紀)には中央集権的な領域国家が形成されたが、末期に政治的統合は弱体化し、やがて第2中間期(前17～16世紀)と呼ばれる国土が分裂した時代に移行する。分裂の原因は、エジプト北部のナイル川デルタ地域に在住していたヒクソスと呼ばれるアジア人の集団が勢力を拡大したからであり、中王国時代から続く王朝は北部の支配領域を失った。王朝の本拠地は北のメンフィス・ファイユーム地域にあったが、ヒクソスから逃れる形で支配層が南のテーベに移動し、新たな王朝を築いたというのが旧来の説である。しかし近年、テーベの王朝は在地の人々が新たに築いたもので、支配層の移動は無かった、という説が提出されており、一致を見ていなかった。古代エジプトの通史は文字資料に依るところが大きいですが、中王国時代末期から第2中間期の資料は乏しく、不明な点が多い。こうした状況を打開するため、考古学的分析から歴史的変遷を解明しようとする機運が国際的に高まっている。

研究代表者が発掘調査を行っているダハシュール北遺跡では、メンフィス・ファイユーム地域の中王国時代最末期の墓が発見された。被葬者は当時の支配層に直接仕えていた人々と考えられており、代表者による墓の遺構、副葬品の分析から、中王国時代末期のダハシュールとテーベの物質文化は連続していた可能性が指摘された。この結果は、この時期に支配層のテーベへの移動があったとする旧来の説を裏付けている。一方で、具体的にいつ頃、どのくらいの期間をかけて、どのような過程を経てこの移行が行われたかが未だ明確ではなく、課題はまだ多い。

2. 研究の目的

エジプト中王国時代末期における統一王朝の衰退と北部メンフィス地域から南部テーベ地域への中枢の移動、その過程における外来勢力拡大との関係など、当該期の王朝交替プロセスを墓出土資料の考古学的検討を中心に碑文資料や理化学的手法を併用して解明することが本研究の目的である。本研究では、当該期の物質文化や葬送儀礼の通時的変遷と共時的関係の2つの視点から交替プロセスを具体化することを計画していた。

3. 研究の方法

(1) メンフィス地域の中王国時代末期における墓の編年構築

メンフィス地域における中王国時代末期の物質文化の変遷は不明な点が多く、その解明は王朝交替プロセスを追跡する上での重要な軸になる。ダハシュール北遺跡は中王国時代後期から末期のまとまった資料を有するメンフィス地域では唯一の墓地遺跡であり、既存の出土資料に加え、発掘を実施して資料を追加し、墓の編年を構築することで、中王国時代末期に至るまでの物質文化の変遷過程を明らかにする。

(2) 副葬品の地理的分布パターンの分析

国の中枢が移動していたとすれば、主要な副葬品の分布傾向も変化してくるはずである。中王国時代末期から第2中間期までの、時期ごとの副葬品の地域差を調べ、共時的関係の変化を考古学的に解明する。

(3) ダハシュール北遺跡の被葬者の社会階層の分析

研究の主対象となるダハシュール北遺跡に埋葬された人々が、そもそも当時の社会の中でどの程度の階層で、どのような役割を担っていた人々だったのかを考古資料・碑文資料から推測する。その成果を受けて、ダハシュール北遺跡の被葬者と同程度の階層の埋葬が、中王国時代末期のテーベにあったかどうか、あったとすればその埋葬に類似性が見られるのか、について検討し、北部メンフィス地域から南部テーベ地域への人々の移動があったかどうかについてさらに議論を深める。

4. 研究成果

(1) 「ビール壺」の編年を基準にした副葬品組成の変遷

ダハシュール北遺跡の副葬品組成の変遷を明らかにするためにまず、中王国時代の遺跡で頻出する大型丸底壺形土器、通称「ビール壺(Beer bottle)」の頸部形状を年代の基準にした。ダハシュール北遺跡から出土したビール壺の頸部形状は、Type I から VI の6タイプに分類された(図1左)。Z. Szafranski によるテル・アッ＝ダバア遺跡出土のビール壺を用いた分析(Szafranski 1998)では、口縁部の径を口唇の厚さで割り、その商に100を乗じたインデックス(Aperture Index 2)が設定され、この値は時代が新しくなるにつれて減少することが層位的に確認された。このインデックスを利用し、各タイプに分類される個体の値を求めたところ、タイプ別の平均からType I～VIの順に並べられた(図1右)。

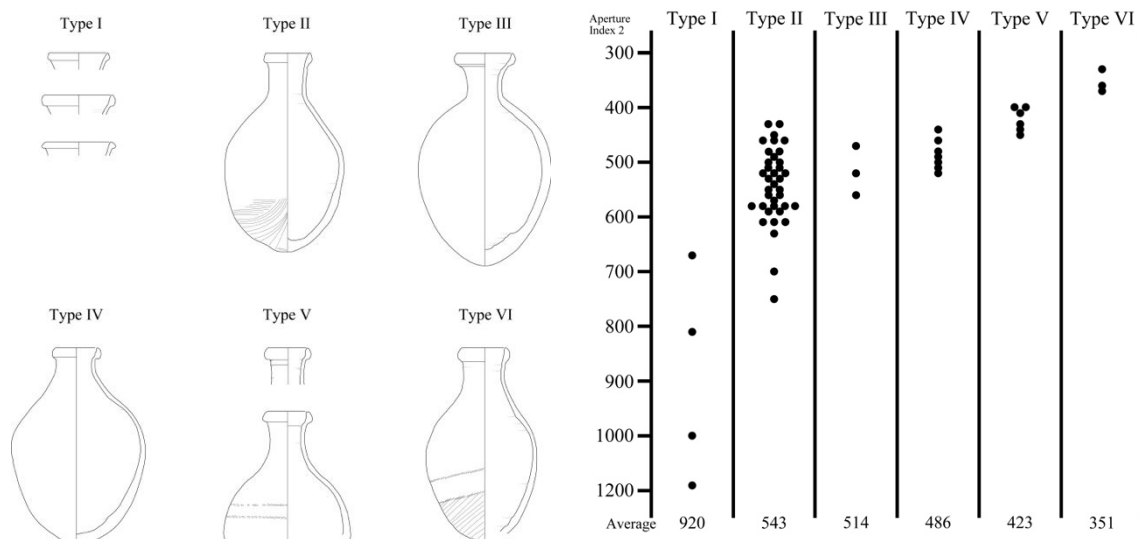


図1 ダハシュール北遺跡出土ビール壺のタイプ分類と Aperture Index 2

これらの6タイプには使用期間にオーバーラップがあった。例えば Type I と Type II では後者の方が出現時期は新しいと推測されたが、両者は1つの墓で共伴している例が確認された。そこでテル・アッ=ダバア遺跡やメンフィスのコム・ラピア遺跡、ダハシュールのアメンエムハト3世のピラミッド・コンプレックスなど外部の資料との比較から、出現順序やオーバーラップの状況が検討された。結果、Type I が最初に出現し、次いで Type II 、 Type III の順序で現れており、Type IV 、 Type V は両方とも使用された期間があったと推測された。Type VI に関しては Type II の時期に同時に使用されていたようだが、いつ頃から始まり、いつまで使用されていたかは特定できなかった。Type VI は Type I と Type II の使用期間と並行して使用されたと考えられた。

以上の結果を元に、Type I 、 Type II 、 Type III のビール壺が出土していた墓を選び、墓から出土している土器以外の副葬品の構成を調査した。副葬品全体の構成の変化から、ダハシュール北遺跡の墓を3つのフェーズ(Phase I~III)に分割した(図2)。

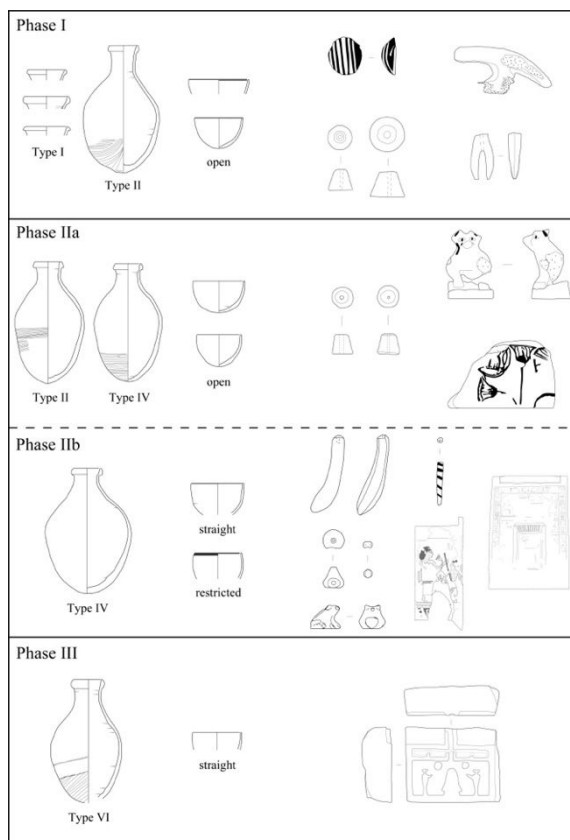


図2 ダハシュール北遺跡における中王国時代の副葬品構成の変化(Phase I~III)

Phase I は Type I と Type II のビール壺が使用された時期で、Type III が出現する前の段階である。

Phase は a と b のサブタイプに分類され、前者はビール壺の Type と Type が並行して使用された時代であり、Phase b は Type のみが使用された時代とした。Phase は Type のビール壺が出現した時代である。そして遺跡外部の年代に関する根拠資料から、これらのフェーズは次のように年代づけられた。

- Phase : アメンエムハト 3 世治世～第 12 王朝末
- Phase : 第 13 王朝初期
- Phase : 第 13 王朝中期

(2) 副葬品の地理的分布パターンの分析

最も出土量の多い土器は特に地域差に関する議論で取り上げられることが多い。各地の土器の類似性についてはしかし、現状土器の形状から判断せざるを得ず、似ている / 似ていないという感覚的な議論に客観性を持たせることが難しかった。

そのため本研究では第 12 王朝後期から第 13 王朝のエジプト全土のビール壺 102 個体を対象に、幾何学的形態測定学の 1 手法である楕円フーリエ解析と主成分分析を応用してその地理的変異の可視化を試みた。この手法は型式学的な細分に依拠せず、形状同士の差異を数値で表現できるという利点がある。完形の資料のみを対象とし、エジプト全土の出土例を集めその外形をデータとして利用した。分析の過程で実測図の左右非対称性が結果に大きく影響を与えてしまうことが判明したので、土器が轆轤成形である事実から片面の外形だけを採用し、反転させて左右対称の図として分析に使用した(図 3)。

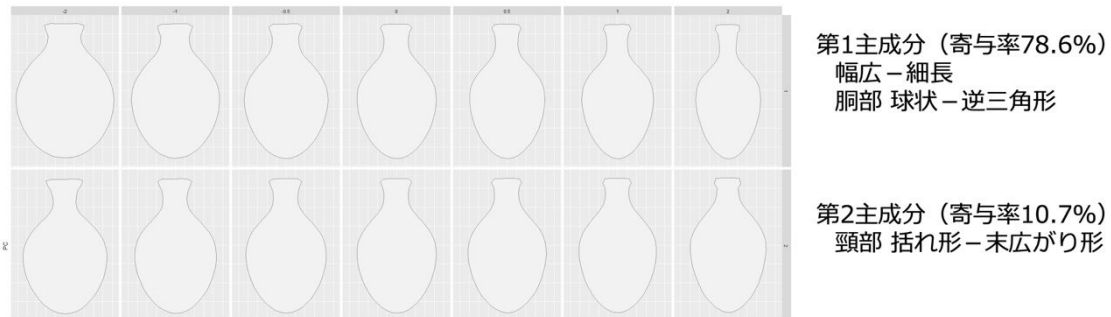


図 3 楕円フーリエ解析と主成分分析の結果 (第 1、2 主成分)

分析の結果、第 13 王朝中期からデルタとテーベで形状の差異が鮮明になることが分かった(図 4)。注目すべきはテーベ地域の通時の変化で、第 13 王朝初期はメンフィス・ファイユーム地域の形状(上記 Type)とはやや離れた値を示すが、第 13 王朝中期ではそれ以前のメンフィス・ファイユーム地域(上記 Type)に近い値が得られた。これは第 13 王朝中期のテーベ地域と前時代のメンフィス・ファイユーム地域とのビール壺形状の近似を示すものである。

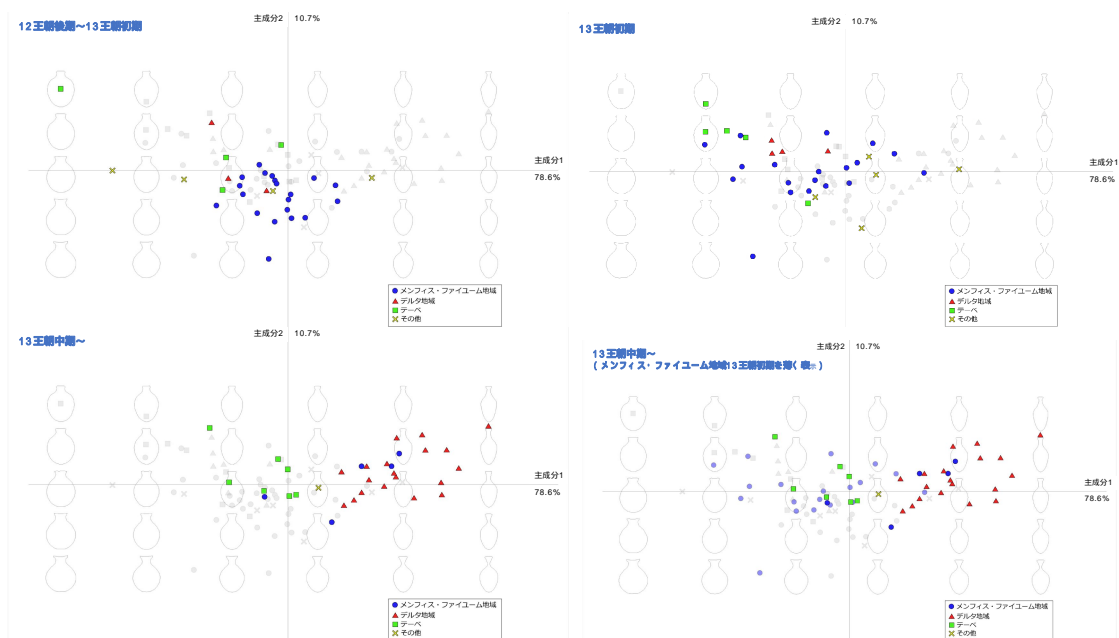


図 4 第 1、第 2 主成分によるプロット図

両者の類似は研究代表者が過去に指摘していたが、これを数理的手法から裏付けることがで

きた。この結果は、土器職人を同伴する程の集団の移動があった可能性を示す1つの根拠として注目される。

(3) ダハシュール北遺跡の被葬者の社会階層の分析

中王国時代の人物の社会階層を推し量る1つの方法として、その人物が持っていた「称号」がある。ダハシュール北遺跡は研究代表者による過去の研究 (Yazawa 2017) によって墓の大きさから Small・Middle・Large の3つのグループに分類されており、副葬品の内容は墓の規模の大小が当時の社会階層の高低を反映していると推測された。この中で Large に分類される 58 号墓から発見された棺には被葬者の名前が称号と共に記されていた (図 5)。この称号保有者の社会的位置付けを分析することで、ダハシュール北遺跡の最上層がどの程度の階層に属していたのかを知る手がかりが得られると考えられた。

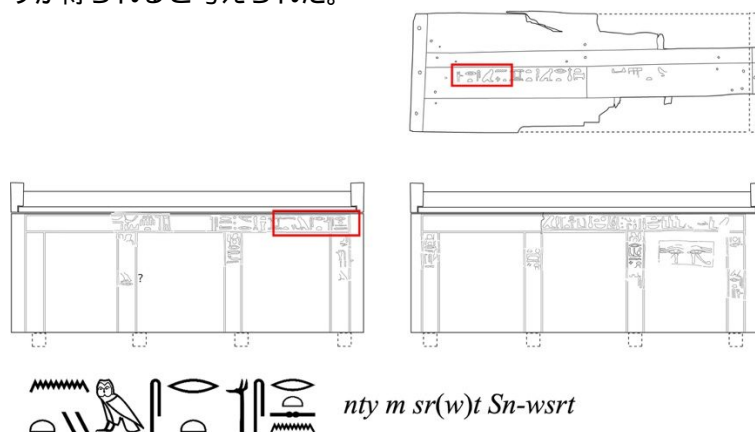


図 5 58 号墓で発見された木棺の復元図と被葬者の称号・名前

58 号墓の被葬者は *nty m srwt*、直訳すれば「高官に属する者」という称号を持つセンウセレットという名前の人物だった。後世の碑文資料によると、この称号を持つ人物は宰相と直接的な配下で、宮廷の活動や地方の施政にも関与していたとされている。一方で、同時代で同じ称号を持つ類例を収集して確認したところ、当時のエリート層だけが持つことを許された「序列の称号」は通常併記されなかったことが明らかになった。したがって、これらの称号を持つ一部の支配層ほど高い地位になかったと考えられる。さらに、*nty m srwt* の称号を持つ人物が埋葬されたシャフト 58 は、ダハシュール北遺跡の中では最上層に含まれるが、「序列の称号」を持つ人物の墓が含まれるセンウセレット 3 世ピラミッド北墓地と比較すると、墓の規模や質の点ではるかに劣っていることが示された。これらのことから、ダハシュール北遺跡の被葬者達は、センウセレット 3 世ピラミッド周辺や北サッカラの第 13 王朝のピラミッド群周辺墓地に埋葬された人々に次ぐ社会階層にあり、これらの支配層に直接仕えていた人々だったと結論づけられた。

以上の分析から、ダハシュール北遺跡の中王国時代第 12 王朝後期から第 13 王朝中期までの編年、そして第 13 王朝中期におけるビール壺のメンフィス-テーベ間の類似性が示される結果となった。このことは、第 13 王朝中期にメンフィス・ファイユーム地域からテーベ地域へ、土器作りに携わるレベルの人を含むような規模の人の移動があった可能性を支持する。

そして社会階層の分析から、ダハシュール北遺跡の被葬者は当時の支配層に支えた人々だったことが指摘された。テーベの第 13 王朝のエリート層は、ナイル川西岸の高所ドウラ・アブ・アル=ナガに墓が造営され、耕地際の低所ではより低い階層の人々がシャフト墓を築いていた。これらの墓の形状・規模や副葬品の構成はダハシュール北遺跡と類似が見られ、ダハシュールと同等の階層の人々がテーベへの移動後に墓所としたという筋書きを想起させる。

引用文献

Szafranski, Z.E., 1998, "Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from Tell El-Dabca," *Ägypten & Levante* 7, 95-119.

Yazawa, K., 2017, "The late Middle Kingdom Shaft Tombs in Dahshur North," in M. Bárta et al. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2015*, Prague: Faculty of Arts, Charles University, 531-544.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa, Hiroyuki Kashiwagi, Kazumitsu Takahashi, Keita Takenouchi, Yuka Yoneyama, Seria Yamazaki, Nonoka Ishizaki	4. 巻 10
2. 論文標題 A Brief Report of the Excavation at Dahshur North: Twenty-Seventh Season, 2020	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association	6. 最初と最後の頁 24-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ken Yazawa	4. 巻 -
2. 論文標題 The Archaeological Context of Small Faience Items in a late Middle Kingdom Tomb in Dahshur North: Evidence for the Sealing Rite of the Burial Chamber?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Star Who Appears in Thebes: Studies in Honour of Jiro Kondo	6. 最初と最後の頁 533-542
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 矢澤 健	4. 巻 145
2. 論文標題 古代エジプトの供献土器に見られる精製と粗製 - アブ・シール南丘陵遺跡の事例 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代	6. 最初と最後の頁 55-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa, Hiroyuki Kashiwagi, Kazumitsu Takahashi, Yuka Yoneyama, Seria Yamazaki, Nonoka Ishizaki, Motoharu Arimura	4. 巻 9
2. 論文標題 A Brief Report of the Excavation at Dahshur North: Twenty-Sixth Season, 2019	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association	6. 最初と最後の頁 17-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤 健	4. 巻 -
2. 論文標題 称号から見たダハシュール北遺跡の中王国時代の被葬者像 - 58号墓を手掛かりとして -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 オンリスへの贈物 エジプト考古学の最前線	6. 最初と最後の頁 194-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 矢澤 健
2. 発表標題 幾何学的形態測定学から見たエジプト中王国時代末期の土器形状の地域性とその変化
3. 学会等名 日本オリエント学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢澤 健、吉村作治
2. 発表標題 紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第27 次調査 (2020)
3. 学会等名 第28回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢澤 健
2. 発表標題 ダハシュール北遺跡調査 最新発掘レポート
3. 学会等名 東日本国際大学エジプト考古学研究所 第5回公開研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 矢澤 健、吉村作治、柏木裕之、山崎世理愛
2. 発表標題 ダハシュール北遺跡シャフト158の出土遺物と利用歴
3. 学会等名 日本オリエント学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢澤 健
2. 発表標題 称号から見たダハシュール北遺跡の被葬者の社会階層に関する一考察
3. 学会等名 日本オリエント学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢澤 健
2. 発表標題 ダハシュール北遺跡2018年度の調査
3. 学会等名 東日本国際大学エジプト考古学研究所第4回公開研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢澤健、吉村作治
2. 発表標題 紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第26次調査（2019）
3. 学会等名 第27回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 矢澤 健
2. 発表標題 古代エジプト中王国時代の高級官僚を支えた人々 ダハシュール北遺跡からの視点
3. 学会等名 早稲田大学考古学会公開講演会・研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢澤健、吉村作治
2. 発表標題 紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第28次調査（2022）
3. 学会等名 第30回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 矢澤 健
2. 発表標題 ダハシュール北遺跡最新発掘レポート（2022）
3. 学会等名 東日本国際大学エジプト考古学研究所第6回公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Sakuji Yoshimura and Masahiro Baba	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Institute of Egyptology, Waseda University	5. 総ページ数 89
3. 書名 Dahshur North [II]: New Kingdom Tomb of Ipay and its Vicinity	

1. 著者名 吉村 作治 (編) 矢澤健 (共著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 256
3. 書名 オシリスへの贈物 エジプト考古学の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	吉村 作治 (Yoshimura Sakuji) (80201052)	東日本国際大学・経済経営学部・総長 (31604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------